

専門学校卒業後の働き方と意識

—YCSJ5 年間のデータから—

キーワード：専修学校／<学校から仕事へ>の移行／キャリア形成／職業教育

三浦 芳恵

1. はじめに

専修学校専門課程(以下専門学校)は、高校卒業後の進学先として、16.8%(平成 28 年度学校基本調査速報値)を占めており、職業等に必要な知識・技能を習得する場として重要な機会を提供している。

近年、日本的雇用のもとでの企業内訓練や福祉供与が縮小する中で、日本型雇用の中で「標準外」とされてきた専門学校経由でのキャリア形成の意義が見直されつつある。特に専門学校教育が若者たちのキャリア形成に与える意義については、従来言われていたような実践的な技術・技能だけではなく、それらを通して行われた人間形成が卒業後のキャリア形成を支えていることが明らかになっている(植上 2011)。

政策的なレベルにおいても専門学校が若者たちのキャリアを支える効果が期待されているものの、学卒後の状況についてはまだ研究が少ない。濱中(2009)は、専門学校卒業後に正規雇用で働く者たちを対象とし、労働市場への参入時に資格が必要となる職業について専門学校教育の効果が高いことを明らかにしているが、一時点における安定した状況が中心的に取り上げられているのみである。経年的な変化や、キャリアの不安定さを含んだ研究としては、専門学校卒業後の初期キャリアについて長期的な視点から検討した李(2009)がある。そこでは、女性や特定の専攻(分野)においてキャリアが非正規雇用に分岐しやすい傾向が見られることが明らかにされていた。しかし、就職や正規雇用の継続といった観点から見たキャリアの安定性だけではなく、若者たち自身がその時点での状態をどのように意味づけているかを検討することも、専門学校が若者たちのキャリアをどのように支えているのかを明らかにする上で必要なことではないだろうか。

そこで本稿では、5 年間の経年的データや仕事・職場への意識面に関する項目が含まれている YCSJ の数量的データを用い、専門学校卒業者の働き方及び仕事・職場に対する意識の傾向について分析を行

った。

2. 使用するデータの概要

本稿で使用するデータは、「若者の教育とキャリア形成に関する研究会(YCSJ: Youth Cohort Study of Japan)」の「若者の教育とキャリア形成に関する調査」(2007-2011: 研究代表 乾彰夫)である。2007 年 4 月 1 日時点で 20 歳である全国の男女が調査対象であり、追跡調査は毎年 1 回、5 年間実施された¹。今回は時系列の変化を明らかにするため、回答者全体(1167 名)の中から、5 年間すべて解答した者たち(891 名)を選択したのち、2011 年時点で「最後に在学した学校」として専門学校²と回答した者 181 名を分析対象とした。

3. 卒業後の働き方と若者の意識

植上(2005)は、養成施設指定制度の有無によって教育内容の設定過程や労働市場が異なることを明らかにしており、専門学校の教育内容を「資格教育」「非資格教育」に分類する必要があることを提起している。本稿では教育内容の違いによる卒業後の働き方や仕事に対する意識のあり方を明らかにするために、学校基本調査で用いられる 8 分野の学科について「資格教育分野/非資格教育分野」に分けて分析することとした。資格教育分野については、工業関係、医療関係、衛生関係、教育・社会福祉関係を一カテゴリとして扱い、その割合は専門学校卒業者の 46.0%であった。非資格教育分野の学科については、農業関係、商業実務関係、服飾・家政関係、文化・教養関係を一カテゴリとして扱い、専門学校卒業生全体に対する割合は 54.0%だった(学科不明は 7 名)。

分析に用いる項目として、雇用形態・労働時間・賃金を調査時点の働き方を示すものとして用いた。また、調査時点での意識については、表 1 の項目を用いて職場への意識の傾向と仕事への意識の傾向に分けて分析することとした。

表1 分析に用いる質問項目

現在の仕事にあてはまること(職場に対する意識)
(1) 仕事にやりがいを感じる
(2) 手ぬきをせずに、仕事に取り組んでいる
(3) 職場の人間関係が良好である
(4) 上司はよく面倒を見てくれる
(5) 職場の先輩・同僚は自分の仕事を手助けしてくれる
(6) 自分の仕事のやり方を自分で決めることができる
(7) 職場全体の仕事のやり方に自分の意見を反映させることができる
(8) お客さんや利用者に喜んでもらえる
(9) 賃金に満足している
(10) 労働時間が長すぎる
(11) 仕事の内容がきつい
(12) 仕事の上での責任が重すぎる
(13) 職業能力を向上させる機会がない
(14) 雇用が不安定である
(15) 単調な繰り返しの仕事が多い
(16) 職場には若者を使い捨てにする雰囲気がある
(17) 仕事にかかわるストレスや不安が大きい
職業生活に対する考え(仕事に対する意識)
(1) 自分のやりたいことを仕事としてやっていきたい
(2) 自分の性格や能力をいかせる仕事につきたい
(3) 仕事を通じて高い収入や地位を得たい
(4) 仕事を通じて人の役に立ちたい
(5) 仕事を通じて高い専門性を身につけたい
(6) 安定した職業生活をおくりたい
(7) 離職・転職せず、同じ会社で働きつづけたい
(8) 仕事も仕事以外の生活も、どちらも充実させたい
(9) あまりがんばって働かず、のんびり暮らしたい
(10) 働かずに生活できるなら、働きたくない
(11) 年齢ではなく仕事の実績によって給料や地位を決めてほしい
(12) お金を得られれば、仕事の中身は何でもかまわない
(13) 就職できなかつたり失業したりするのではないかと、不安である
(14) 生活するのに十分な収入が得られる仕事をやっているか、不安である

3-1. 卒業後の働き方

まず、表2で学科と卒業後の働き方の関係について2回目時点と5回目時点の状況を確認したい。2回目時点では正社員・正職員として働く者たちが資格教育分野で84.0%、非資格教育分野で50.0%となっている。統計的にも有意な差が出ており、資格教育分野で正社員・正職員として働く者たちの割合が高い。

5回目時点においても、資格教育分野で非資格教育分野と比較して正社員・正職員の割合が1割程度高い、統計的な有意差が出ている。2回目、5回目ともに資格教育分野における正社員・正職員率が高いことがわかる。

表3は、学科分類(資格教育分野/非資格教育分野の区分)別の月収を示したものである。2回目時点では、学科別に有意差があり、20万円以上30万円未満の者が資格教育分野で31.5%となっているが、非資格教育分野では8.7%にとどまっている。また、10万円以上20万円未満の者たちは非資格教育分野で82.6%となっていたのに対して、資格教育分野では66.7%にとどまっている。2回目時点における月収については、非資格教育分野よりも資格教育分野のほうが相対的に高い水準にあると言えよう。

5回目時点になると、学科別の有意差は見られなかった。資格教育分野で30万円以上の者たちが10.0%となるが、非資格教育分野では1.8%にとどまっている。20万円以上30万円未満の者たちが資格教育分野で25.0%、非資格教育分野で21.4%、10万円以上20万円未満が資格教育分野で58.3%、非資格教育分野では67.9%となっており、2回目時点より学科分類による差は縮まっていると言える。

表 2 学科分類別雇用形態

・ 2 回目時点 (2008 年)

	正社員・正職員	非正規社員・職員	N
資格教育分野	84.0%	16.0%	25 p.<0.05
非資格教育分野	50.0%	50.0%	20
合計	68.9%	31.1%	45

・ 5 回目時点 (2011 年)

	正社員・正職員	非正規社員・職員	自由業・家族従業者	N
資格教育分野	75.0%	20.0%	5.0%	60 p.<0.05
非資格教育分野	65.5%	34.5%	0.0%	55
合計	70.4%	27.0%	2.6%	115

表 3 学科分類別月収

・ 2 回目時点 (2008 年)

	10万円未満	10万円以上 20万円未満	20万円以上 30万円未満	N
資格教育分野	1.9%	66.7%	31.5%	54 p.<0.05
非資格教育分野	8.7%	82.6%	8.7%	46
合計	4.0%	40.0%	34.0%	100

・ 5 回目時点 (2011 年)

	10万円未満	10万円以上 20万円未満	20万円以上 30万円未満	30万円以上	無回答	N
資格教育分野	5.0%	58.3%	25.0%	10.0%	1.7%	60
非資格教育分野	7.1%	67.9%	21.4%	1.8%	1.8%	56
合計	6.0%	62.9%	23.3%	6.0%	1.7%	116

表4は2回目時点と5回目時点の2時点において、学科分類別の週あたり労働時間の平均を示したものである。2回目時点において、資格教育分野で45.70時間、非資格教育分野において平均が44.8時間となっており、資格教育分野において週労働時間が0.9時間長いが、有意差は見られない。

5回目時点での週あたり労働を比較すると、資格教育分野で週42.37時間、非資格教育分野で43.12時間となっており、比較すると非資格教育分野で0.75時間長いが、こちらもやはり有意差が見られない。労働時間においては、資格教育分野・非資格教育分野ともに有意差は見られず、大きな違いはないと考えられる。

以上、専門学校卒業者たちの働き方を学科分類ごとに概観すると、2回目時点と5回目時点の雇用形態において資格教育分野で正社員・正職員の割合が高い傾向が見られた。月収については、2回目時点で学科分類ごとの有意差が見られており、資格教育分野で月収が高い傾向がうかがえるが、5回目時点では有意差は見られなかった。また、労働時間については、2回目時点と5回目時点の両方で学科分類ごとの有意差は見られなかった。以上から、資格教育分野で正社員・正職員割合の高さが見られるものの、長期的に見て収入の安定、労働時間の短さにつながっているとは言えない可能性が示唆されるのではないだろうか。

表4 学科分類別 週あたり労働時間の平均

・2回目時点(2008年)

	平均値	N
資格教育分野	45.70	41
非資格教育分野	44.80	36
合計	45.28	77

・5回目時点(2011年)

	平均値	N
資格教育分野	42.37	47
非資格教育分野	43.12	43
合計	42.73	90

3-2. 職場への意識の傾向

次に、職場への意識の傾向を確認するため、意識に関する質問項目について「とてもあてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「まったくあてはまらない」を1点として点数化し、回答の平均値を比較した。表5は、2回目時点(2008年)と5回目時点(2011年)の2時点における平均値の差を示したものである。平均値の差は、2回目時点と5回目時点での差と、資格教育分野と非資格教育分野で見られた差の2種類を示している。

2回目時点の平均値と5回目時点における平均値に有意差が見られた項目は、資格教育分野で「職場の先輩・同僚は自分の仕事を手助けしてくれる」「労働時間が長すぎる」の2項目であり、非資格教育分野で「仕事にやりがいを感じる」「職場の人間関係が良好である」「上司はよく面倒を見てくれる」「職場の先輩・同僚は自分の仕事を手助けしてくれる」の4項目であった。2回目時点と5回目時点の平均値をそれぞれ比較すると、資格教育分野では「職場の先輩・同僚は自分の仕事を手助けしてくれる」が3.50点から3.27点に0.23点低下、「労働時間が長すぎる」が2.45点から2.68点に上昇していた。非資格教育分野においては、「仕事にやりがいを感じる」が3.05点から2.81点に0.24点低下、「職場の人間関係が良好である」が3.27点から3.00点に0.27点低下、「上司はよく面倒を見てくれる」が3.27点から3.02点に0.25点低下、「職場の先輩・同僚は自分の仕事を手助けしてくれる」が3.50点から3.13点に0.37点低下する傾向が見られた。

2回目時点と5回目時点を比較して、職場の先輩・同僚からの手助けがあると感じられなくなっている傾向は、資格教育分野、非資格教育分野に共通している。このことは仕事に慣れてきたために、先輩や同僚からの手助けが少なくなっていることを示しているのではないだろうか。また、非資格教育分野においては、「職場の人間関係が良好である」「上司はよく面倒を見てくれる」といった項目でも低下傾向が見られており、職場の人間関係について肯定的に感じられなくなる傾向があるのではないかと考えられる。さらに、仕事へのやりがいが非資格教育分野についてのみ低下傾向が見られることは、資格教育分野の学科出身者において比較的仕事へのやりがいが継続することを示

しているのではないだろうか。

さらに、2回目時点と5回目時点における学科分類ごとの差について確認したところ、2回目時点はどの項目についても学科分類ごとの有意差は示されなかった。

5回目時点では、「仕事にやりがいを感じる」

「お客さんや利用者に喜んでもらえる」「労働時間が長すぎる」「雇用が不安定である」の4項目で学科分類ごとの有意差が見られている。「仕事にやりがいを感じる」について、資格教育分野で3.11点、非資格教育分野で2.81点となっており、資格教育分野で0.3点高い平均値を示している。「お客さんや利用者に喜んでもらえる」では、資格教育分野で3.38点、非資格教育分野で2.89点となっており、資格教育分野で0.49点高い平均値を示している。「労働時間が長すぎる」では、資格教育分

野で2.68点、非資格教育分野で2.24点となっており、資格教育分野で0.44点高い平均値を示している。「雇用が不安定である」については、資格教育分野で1.89点、非資格教育分野で2.19点となっており、非資格教育分野において0.3点高い平均値を示している。

資格教育分野において「仕事にやりがいを感じる」「お客さんや利用者に喜んでもらえる」「労働時間が長すぎる」が高い平均値を示していることから、仕事への責任の重さがうかがえるのではないだろうか。また、非資格教育分野で「雇用が不安定である」がより高い平均値を示していることから、不安定な雇用状態が主観的にも強く感じられている傾向があるのではないかと考えられる。

表5 学科分類別職場に対する意識の平均値

職場に対する意識項目	学科分類	2回目時点(2008年時点)	5回目時点(2011年時点)	(5回目の平均値)-(2回目の平均値)	(資格教育系の平均値)-(非資格教育系の平均値)		集計度数
					2回目	5回目	
(1)仕事にやりがいを感じる	資格教育分野	3.08	3.11	0.02	0.04	0.30*	56
	非資格教育分野	3.05	2.81	-0.24*			63
(2)手ぬきをせずに、仕事に取り組んでいる	資格教育分野	3.23	3.34	0.11	-0.20	0.02	56
	非資格教育分野	3.43	3.32	-0.11			63
(3)職場の人間関係が良好である	資格教育分野	3.13	3.02	-0.11	-0.14	0.02	56
	非資格教育分野	3.27	3.00	-0.27*			63
(4)上司はよく面倒を見てくれる	資格教育分野	3.11	3.07	-0.04	-0.16	0.06	56
	非資格教育分野	3.27	3.02	-0.25*			63
(5)職場の先輩・同僚は自分の仕事を手助けしてくれる	資格教育分野	3.50	3.27	-0.23*	0.00	0.14	56
	非資格教育分野	3.50	3.13	-0.37*			62
(6)自分の仕事のやり方を自分で決めることができる	資格教育分野	2.64	2.82	0.18	-0.17	0.04	56
	非資格教育分野	2.81	2.78	-0.03			63
(7)職場全体の仕事のやり方に自分の意見を反映させること	資格教育分野	2.38	2.55	0.18	-0.09	0.13	56
	非資格教育分野	2.46	2.43	-0.03			63
(8)お客さんや利用者に喜んでもらえる	資格教育分野	3.25	3.38	0.13	0.17	0.49*	56
	非資格教育分野	3.08	2.89	-0.19			62
(9)賃金に満足している	資格教育分野	2.39	2.30	-0.09	0.27	0.22	56
	非資格教育分野	2.13	2.08	-0.05			63
(10)労働時間が長すぎる	資格教育分野	2.45	2.68	0.23*	-0.08	0.44*	56
	非資格教育分野	2.52	2.24	-0.29			63
(11)仕事の内容がきつい	資格教育分野	2.52	2.54	0.02	-0.08	0.13	56
	非資格教育分野	2.60	2.40	-0.19			62
(12)仕事の上での責任が重すぎる	資格教育分野	2.64	2.70	0.05	0.15	0.24	56
	非資格教育分野	2.49	2.46	-0.03			63
(13)職業能力を向上させる機会がない	資格教育分野	2.13	2.22	0.09	-0.05	-0.12	55
	非資格教育分野	2.17	2.33	0.16			63
(14)雇用が不安定である	資格教育分野	2.00	1.89	-0.11	-0.10	-0.30*	56
	非資格教育分野	2.10	2.19	0.10			63
(15)単調な繰り返しの仕事が多い	資格教育分野	2.52	2.48	-0.04	-0.01	-0.04	56
	非資格教育分野	2.52	2.52	0.00			63
(16)職場には若者を使い捨てにする雰囲気がある	資格教育分野	1.54	1.64	0.11	-0.17	-0.10	56
	非資格教育分野	1.71	1.74	0.03			62
(17)仕事にかかわるストレスや不安が大きい	資格教育系	2.93	2.82	-0.11	0.17	0.12	56
	非資格教育系・その他	2.76	2.70	-0.06			63

*=p<0.05

3-3. 仕事に対する意識の傾向

表6は、仕事に対する意識について平均値の差を示したものである。

2回目時点と5回目時点で有意差がある項目は、資格教育分野における「自分の性格や能力をいかせる仕事につきたい」のみであり、3.59点から3.34点に0.25点低下していることが示されている。資格教育分野の者たちは、5回目時点にかけて自らの性格や能力が仕事に生かされているという感覚が持てなくなり、仕事に対する困難を感じ始めているのではないだろうか。ほかに2回目時点と5回目時点で平均値に有意差がある項目はなかったことから、全体的にどちらの学科分類においても仕事に対する意識で大きな意識の変化はなかったと言える。

次に、学科分類ごとの平均値の差について有意差が示されている項目は、「就職できなかつたり失業したりするのではないかと不安である」「生活するのに十分な収入が得られる仕事をやっているか、不安である」の2項目であり、2回目時点と5回目時点で有意差が見られていた。「就職できなかつたり失業したりするのではないかと不安である」は、2回目時点において資格教育分野で1.99点であるのに対して、非資格教育分野では2.42点で、0.43点高い傾向を示している。同様に、5回目時点においても、資格教育分野で2.07点、非資格教育分野で2.55点と、非資格教育分野で0.48点に高い傾向を示している。「生活するのに十分な収入が得られる仕事をやっているか、不安である」については、2回目時点の資格教育分野で2.43点、非資格教育分野で2.87点と非資格教育分野において0.44点高い割合を示している。5回目時点では資格教育分野で2.46点、非資格教育分野で3.00点となっており、非資格教育分野で0.54点高い割合が示されている。このことから、2回目時点から5回目時点にかけて、非資格教育分野で雇用の継続や生活に対する不安が一貫して感じられている傾向にあると言える。

か、不安である」の2項目であり、2回目時点と5回目時点で有意差が見られていた。「就職できなかつたり失業したりするのではないかと不安である」は、2回目時点において資格教育分野で1.99点であるのに対して、非資格教育分野では2.42点で、0.43点高い傾向を示している。同様に、5回目時点においても、資格教育分野で2.07点、非資格教育分野で2.55点と、非資格教育分野で0.48点に高い傾向を示している。「生活するのに十分な収入が得られる仕事をやっているか、不安である」については、2回目時点の資格教育分野で2.43点、非資格教育分野で2.87点と非資格教育分野において0.44点高い割合を示している。5回目時点では資格教育分野で2.46点、非資格教育分野で3.00点となっており、非資格教育分野で0.54点高い割合が示されている。このことから、2回目時点から5回目時点にかけて、非資格教育分野で雇用の継続や生活に対する不安が一貫して感じられている傾向にあると言える。

表6 学科分類別仕事に対する意識の平均値

仕事に対する意識項目	学科分類	2回目時点 (2008年時点)	5回目時点 (2011年時点)	(5回目の平均値)-(2回目の平均値)	(資格教育系の平均値)-(非資格教育系の平均値)		集計度数
					2回目	5回目	
(1)自分のやりたいことを仕事としてやっていきたい	資格教育分野	3.49	3.53	0.04	0.11	0.00	54
	非資格教育分野	3.38	3.53	0.15			47
(2)自分の性格や能力をいかせる仕事につきたい	資格教育分野	3.59	3.34	-0.25*	0.04	-0.19	54
	非資格教育分野	3.55	3.53	-0.02			47
(3)仕事を通じて高い収入や地位を得たい	資格教育分野	3.07	3.04	-0.03	-0.17	-0.28	54
	非資格教育分野	3.24	3.33	0.09			47
(4)仕事を通じて人の役に立ちたい	資格教育分野	3.27	3.32	0.05	0.04	0.00	54
	非資格教育分野	3.23	3.32	0.09			46
(5)仕事を通じて高い専門性を身につけたい	資格教育分野	3.40	3.30	-0.09	0.09	-0.12	54
	非資格教育分野	3.31	3.42	0.11			46
(6)安定した職業生活をおくりたい	資格教育分野	3.60	3.55	-0.05	0.04	-0.14	54
	非資格教育分野	3.56	3.68	0.12			47
(7)離職・転職せず、同じ会社で働きつづけていきたい	資格教育分野	2.83	2.61	-0.22	0.01	-0.41	54
	非資格教育分野	2.82	3.02	0.20			47
(8)仕事も仕事以外の生活も、どちらも充実させたい	資格教育分野	3.70	3.77	0.07	0.05	0.08	54
	非資格教育分野	3.65	3.69	0.05			47
(9)あまりがんばって働かず、のんびり暮らしたい	資格教育分野	2.92	2.73	-0.19	0.21	-0.11	54
	非資格教育分野	2.71	2.84	0.13			47
(10)働かずに生活できるなら、働きたくない	資格教育分野	2.41	2.51	0.09	-0.15	-0.06	54
	非資格教育分野	2.56	2.56	0.00			46
(11)年齢ではなく仕事の実績によって給料や地位を決めたい	資格教育分野	2.89	2.95	0.05	0.04	0.04	54
	非資格教育分野	2.85	2.91	0.06			47
(12)お金を得られれば、仕事の中身は何でもかまわない	資格教育分野	1.81	1.77	-0.04	0.10	-0.03	53
	非資格教育分野	1.70	1.80	0.09			47
(13)就職できなかつたり失業したりするのではないかと、不安である	資格教育分野	1.99	2.07	0.07	-0.43*	-0.48*	54
	非資格教育分野	2.42	2.55	0.13			47
(14)生活するのに十分な収入が得られる仕事をやっているか、不安である	資格教育分野	2.43	2.46	0.04	-0.44*	-0.54*	54
	非資格教育分野	2.87	3.00	0.13			46

*p<0.05

4. まとめ

これまで、資格教育系学科が相対的に安定した雇用状態にあること(濱中 2009)が明らかにされてきたが、本稿でも資格教育分野において相対的に雇用が安定している傾向が見られた。しかし、労働時間は非資格教育分野と同水準である傾向が見られ、意識面では5回目にかけて労働時間の長さを感じられるようになる変化が見られていた。資格教育分野では、仕事へのやりがいを感じられるようにはなっているものの、その分仕事への責任や負担についても過重となっている傾向が見られるのではないだろうか。

一方、非資格教育分野において見られる雇用や生活の相対的な不安定さは、意識面においても強く感じられているのではないだろうか。雇用や生活に関する意識のほか、職場の人間関係に関しても肯定的に感じられなくなる傾向が見られており、このことが雇用や生活の状態とどのような関係にあるのかも今後確認していく必要があるだろう。

本稿では資格教育分野／非資格教育分野に分けて傾向を確認してきたが、これらの傾向が専門学校卒業生特有の傾向と言えるのかは、大卒者・高卒者などと比較してみなければ明らかにならないだろう。特に、仕事に関する意識で2年目から5年目にかけて大きな変化が見られなかったことが専門学校出身者特有の傾向であるとするならば、専門学校教育特有の影響が雇用や生活の安定ではなく、意識面の安定に及ぼされていることが言えるのではないだろうか。

なお、分析結果については、サンプル数が少なく、統計的な問題がないとは言えないため、今後の示唆にとどめたい。

○参考・引用文献

- 濱中淳子(2009)「専修学校卒業生の就業実態—職業教育に期待できる効果の範囲を探る」『日本労働研究雑誌』51巻7号、34-43頁。
- 小方直幸編(2009)『専門学校教育と卒業生のキャリア』高等教育研究叢書(広島大学高等教育開発センター)。
- 李敏「専門学校卒業生の初期キャリア」小方直幸編(2009)『専門学校教育と卒業生のキャリア』高等教育研究叢書(広島大学高等教育開発センター)33-47頁。
- 植上一希(2005)「専門学校の教育内容の検討」産業教育研究第35巻第1号。
- 植上一希(2011)『専門学校の教育とキャリア形成 進学・学び・卒業後』大月書店。

注

¹ 調査手続きの詳細については、(<http://www.comp.tmu.ac.jp/yicsj2007/questionary.html>)を参照されたい。

² 調査票では、専修学校専門課程と専修学校一般課程が区別されておらず、「専門学校」とのみ表記されていた。本来、専門学校は専修学校専門課程のみを指すが、対象者の中には専修学校一般課程に在学していた者も一部含まれている可能性がある。